

文 化



星野 保

ほしの・たもつ 1964年東京生まれ。八戸工業大学工学部教授。専門は菌類。著書に「すごいぜ!菌類」「菌世界紀行」「菌は語る」など。

題名を見た読者の方は青いバラの様な珍奇な話や、きのこに詳しい方なら、海岸の松林に生える松露などを想像するかも知れない。

しかし、時期さえ合えば波打ち際の直ぐそばまで様々な種類のきのこが生えるのだ! その光景を目にする、きのこ好きほど、目を丸くする。それ程、場違いな奴等がそこにいるのだ!

この記事の気取った写真の下に説明があるように、私はほぼ無名の菌学者だ。だから説明が必要になる。しかし、私は、ガマンホタケという小さなきのこを専門にする。その世界では5本の指に入る研究者でもある。なにせこの世に5人しか専門家がいないのだから、嘘ではない。

☆☆☆☆ そんな私が他の研究者から連絡を貰ったのは、16年前のことだ。私の菌(菌好きは大抵「菌」)が北海道の砂浜で見つかったからだ。調べてみるとこれまで記録のない

砂浜のキノコ

きのこであり、その特徴と共に新たに名を付け報告した。

このスナハマガマンホタケの一押しの特徴は、波に乗って移動することだ。きのこは、植物の種子に当たる胞子を風に飛ばして繁殖する。ガマンホタケは、これに加えて球根のような菌核をもつ。彼らは、落葉を餌に直径数mmの丸くて小さな菌核を作る。これが春に土に埋もれて、苦手な夏を乗り切るのだ。そして秋になると同じ場所できのこを出す。

砂浜のガマンホタケも菌核が砂に埋もれるまでと同じだが、埋まった場所が砂浜なのでさらに一波乱ある。夏の台風・冬の爆弾低気圧は、大時化をもたらし、時に浜の地形すら変えてしまう。ガマンホタケの菌核も波浪に飲まれ、もみくちゃにされるだろう。しかし、彼らはしぶとく生き残り、去年と違った場所にきのこを出す。

普通のガマンホタケの菌核は水に沈むが、砂浜の菌核は浮くのだ。皆が知らぬ小さなきのこは、大きなく乱を受ける砂浜の環境に適応し、大波にさらわれても、自ら浮き上がり、再び砂の上に這い上がるスゴ技を持っているのだ。

海流分散を、存知だろうか? 陸の生物が海流に乗って沿岸や、より離れた場所に分布を広げることだ。歌にある浜辺に流れ着いた椰子の実は、その好例だろう。虫などは流木に乗って移動する。そして流木には菌糸が潜み、落ちて着き先できのこを出すこともある。だが、身(菌核)一つで荒波を乗り越えるきのこは、砂浜のガマンホタケ位だろう。

私は、今もこのきのこを追っている。札幌にいた頃には、北海道の日本海側からオホーツク海側で菌核を採集した。太平洋側や本州にも足を延ばしたが、転勤などの事情で手が付けられずにいた。その後、友人から気になる情報を貰った。

あのガマンホタケが、鳥取から秋田まで砂浜にいると言ったのだ。さらに青森では津軽海峡に面した下北半島の先端で採集したと言った。

遺伝子と比較すると北海道・青森の菌と秋田以南の菌は僅かに違っている。青森を境に二つの集団に徐々に分かれたようだ。どれも日本海を北上する対馬海流に沿

って分布する。☆☆☆☆

いきなりの私事で恐縮だが昨年、新たな研究環境を求めて八戸にある大学に転職し、これを機に砂浜のガマンホタケの調査を再開した。つくはで働いていた頃、新千歳行きの飛行機から眺める下北半島の滑らかな曲線が家に帰るサインだったが、今はこれに沿って車を走らせている。あの曲線は、地上では砂浜なのだ。

他県から見れば意見はあろうが、下北半島の付け根からチョイ下にある八戸市も陸奥湾の奥に位置する青森市も十分に都会だ。いずれも街中に近づくほど砂浜は開発され、お目当てのきのこはほとんどない。砂浜のきのこの様なイメージし難いモノは、人目につかずに消えてしまうのなら本当に残念だ。砂浜のガマンホタケの様じっくり調べると思わぬ物語を語ってくれる生き物は他にもあると思う。

昨年、私は青森県内各地の砂浜でガマンホタケと再会した。そして、彼らは太平洋側にもたどり着いていたのだ! その遺伝型は本州の日本海側と同じ、つまり津軽海峡を西から東に海流に乗

り、渡ってきたのだろう。物言わぬきのこの話を聞くにはじっくり調べるしかない。幸運なことに、私にはその時間があると

思う。

※この記事・写真等は、日本経済新聞社の承諾を得て転載しています。